

聴覚障害児の保護者を対象としたクローズドコミュニティの研究

A study of a closed community for parents of deaf children

渡部 日和¹⁾
指導教員 吉岡 英樹¹⁾

1) 東京工科大学メディア学部

アブストラクト：聴覚障害児の保護者が情報交換をするツールの一つに、LINE オープンチャットがあるが、質への回答が得られるかはコミュニティの参加者などにより差異がある。本研究では、2つのオープンチャットを分析し、保護者が安心して情報交換できる理想的なクローズドコミュニティの条件を検証する。

キーワード：聴覚障害児, 保護者, オープンチャット

1. はじめに

近年, 世界では通常学級にインテグレーションする聴覚障害児が増えている[1]. また, 補聴器の性能向上や人工内耳手術の低年齢化により[2], 聾学校に通う聴覚障害児が減少し, 通常学級に通う子どもが増えている[3]. 聾学校では保護者が送迎を行うことが一般的で, その過程で保護者同士の交流が生まれやすく, 子どもに関する有益な情報を共有しやすい環境がある. 一方, 通常学級では聴覚障害児の保護者と接する機会が少なく, 情報交換の場も限られる為, 両者の間に情報の格差が生じる問題がある. そこで, 聴覚障害児の保護者がよく使用する情報交換ツールの一つに LINE オープンチャット(以下, チャット)がある. しかし, チャットの参加者によって, 質問に対し, 回答まで行きつく事もあれば, そうでない場合もあると推測される.

本研究では, 実際に活動している2つのオープンチャットを元に分析を行う. それをもとに, 理想的なクローズドコミュニティの条件を定義し, 検証する.

2. 研究手法

はじめに, 2つの既存チャットを内容分析し, それぞれのメリットやデメリットを明らかにする. さらに, 質問者と回答者の立場によって

コミュニケーションのやり取りがどのように変化するのかを分析する. 次に, この内容分析の結果をもとに, 理想的なクローズドコミュニティの条件を設定する. 最後に, 保護者が安心して情報交換しやすいコミュニティの在り方についても分析する.

3. 検証

2つの既存のチャットをチャット A, チャット B とする. 図表1は2つのチャットをまとめたものである.

チャットA	チャットB
開始: 2023.12.11	開始: 2023.12.11 ※初投稿は2024.01.15
範囲: 難聴児全般	範囲: 中等度難聴
規模: 200人	規模: 47人
年齢: 0歳~17歳	年齢: 0歳~13歳

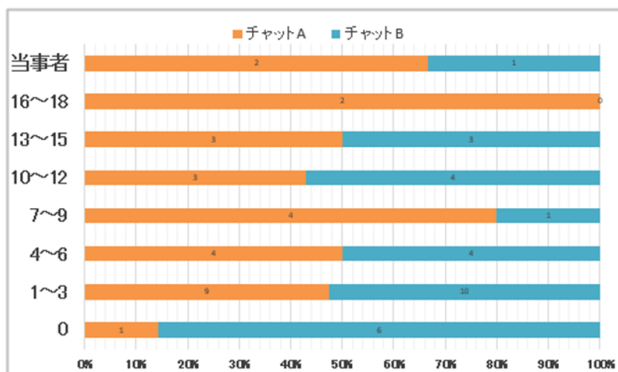
図表1 チャット概要

質問者, 回答者, 会話内容などをそれぞれの会話ごとにまとめ, 会話内容の特徴を分析する. また, 図表2に, 参加者ごとの発話数を示した. チャット内での発言をする人の割合を出し, 発言のしやすさについて分析したいと考えている. また, チャット A とチャット B それぞれの発言者の難聴である子どもの年齢や当

事者の割合を図表3にまとめた。

図表2 発言数まとめの例

会話	発言者	役割	会話数
会話1	A	質問者	12
会話1	B	回答者	4
会話1	C	回答者	1
会話1	D	回答者	2
会話1	E	回答者	2
会話1	F	回答者	1
会話1	G	質問者	2
会話1	H	回答者	1
会話1	合計		25
会話2	a	質問者	7
会話2	b	回答者	1
会話2	c	回答者	1
会話2	d	回答者	1
会話2	e	回答者	1
会話2	f	回答者	2
会話2	g	回答者	1
会話2	合計		14



図表3 発言者の難聴児の年齢と当事者の割合

4. 結果

チャットAでは質問内容から派生し、議論が発展していたり、経験のある人から経験の浅い人へアドバイスしているような場面が多かったことに対し、チャットBでは同じくらいの経験値の人が自身の経験を共有している場面が多かった。その要因の一つとして、チャット発言者の難聴児の年齢と当事者の割合である図表3を示す。この図表3を見るとチャットAは7~9歳、16~18歳また当事者の方の割合が多く、チャットBは0歳、1~3歳、10~12

歳の割合が多いことが分かる。また、チャットAは当事者の方の発言数が多く、自分の経験談を話していたが、チャットBでは当事者はいるが、あまり発言を積極的にしていなかった。これらの事からチャットAでは経験のある保護者や当事者の方がおり、投稿された課題に対して議論が深まりやすく、チャットBでは経験の浅い親御さんが多いことから、自分の経験談からの話でとどまりやすいのではないかと考えられる。

5. 展望

今回の内容分析により、チャットA、チャットBの投稿された質問に対する返答の違いと要因の一つが明らかになった。今後は実際のやりとりから特徴の分析を行い、傾向を分類する。これにより、質問者と回答者の立場によってコミュニケーションのやり取りがどのように変化するのかを分析していく。この内容分析の結果をもとに、理想的なクローズドコミュニティの条件を設定する。

参考文献

- [1] 中村信雄(2022)「インクルーシブ教育の現在—ユネスコとEUにおけるインクルーシブ教育—」, 『東京理科大学教職研究』7, p.95-104, 東京理科大学教育支援機構教職教育センター。
- [2] 一般社団法人日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会(2013)「人工内耳について」, <https://www.jibika.or.jp/modules/hearing_loss/index.php?content_id=3>2024年8月18日アクセス。
- [3] 沖津卓二(2016)「普通学校における聴覚障害児への対応」, 『日本小児耳鼻咽喉科学会』37, p.241-245, 日本小児耳鼻咽喉科学会